

巻頭言

「東京都中途失聴・難聴者の集い」

理事長 新谷友良

台風14号の影響もなく快晴に恵まれた9月25日、第34回の「東京都中途失聴・難聴者の集い」が開催されました。多くの方に参加いただきありがとうございました。また、コロナ禍のさまざまな困難のなかで集いの開催準備にあられた実行委員の方々、その他開催にご協力いただいたすべての皆さまに感謝いたします。

今回もグリーン基調のすっきりとした記念誌が準備されましたが、今までの集いの記念誌を見て、改めて1981年以来連綿と続いてきた「東京都中途失聴・難聴者の集い」のいくつかを思い出しています。

私の最初の集い参加は、2002年に吉祥寺の前進座劇場で開催された第18回の集いでした。今からちょうど20年前、東京都中途失聴・難聴者手話講習会の入門クラスで手話の勉強を始めたばかりで、クラスの講師の方に勧められて参加したように記憶しています。それがきっかけで、2004年にはアルカディア市ヶ谷で開催された全難聴の福祉大会で「オープンカレッジ」の下働きをしました。分科会が21もあって、誰もいなくなった会社で夜遅くまで分科会レイアウトを作って、やっとでき上がり、いそいそとアルカディアの担当の方に見せにいったところ、「このレイアウトは避難通路が確保されていません。参加者に車いすの方はいませんか？ この導線では車いすの方が通れませんよ…」などさまざまなダメを出されて落ち込みました。

そのリベンジで、第21回の「集い」の実行委員長にしゃしゃり出しました。会場は馴染みのある吉祥寺の前進座劇場、前進座の皆さんの協力で「歌舞伎教室」をメインのアトラクションにすることができました。午前中の企画では、当時「東京手話通訳等派遣センター」の所長をされていた市川恵美子さんに、「手話と中途失聴・難聴者」で記念講演をお願いしました。その時の記念誌の奥付に14人の実行委員の方の名前が載っています。会うことがほとんどなくなった方もいますが、広告取りに走り回ったこと、「歌舞伎教室」の進行で随分遣り合ったことなど、すべてが懐かしい記憶で残っています。

今回の集いでも、会場で参加された方、オンラインで参加された方、準備に奔走された方、さまざまな記憶を残されたことと思いますが、コロナ感染が続く中、人と交わることの楽しさ、大切さを改めて確認できた今回の「集い」でした。